



『FR7』がステージ上に入り込み 観客席からでは体験できない映像を届ける

WOWOWエンタテインメント株式会社
<https://wowowent.co.jp>

WOWOW
 ENTERTAINMENT, INC.

WOWOW エンタテインメント株式会社の主力業務の1つである映像事業・中継事業は、グループ企業外からも依頼を受け、メジャーアーティストをはじめ数多くの音楽ライブ収録・中継を実施しています。その撮影において Cinema Line カメラ『FR7』を導入し、多くの現場に投入。同社が音楽ライブ映像に求めるクオリティ、『FR7』導入を決めたきっかけ、成果について、藤本 誠司 様と吉田 夏樹 様にお伺いしました。

劇場上映にも耐える画質のリモートカメラ

100件を超える音楽ライブ収録・中継で『FR7』を投入

藤本 当社は昔からクオリティの探求心が強く、劇場でそのまま上映しても問題ないレベルの映像を意識して撮影しています。また、特に私は、シネマティックな演出を心掛けています。音楽ライブ収録や中継は年間200件ほどありますが、最近のプロジェクトで最も多いカメラ構成は、Cinema Line カメラ『VENICE』、『FX9』、『FX6』、2/3インチセンサーの『HDC-5500』の組み合わせです。

吉田 最近の現場では、このカメラ構成に加えて『FR7』も毎回使用しているように思います。直近の現場でも様々な場面、バリエーションで活用しており、私自身も多くの現場で『FR7』のオペレーションを経験しました。



WOWOW エンタテインメント株式会社
 技術事業本部 中継技術部 藤本 誠司 様



WOWOW エンタテインメント株式会社
 技術事業本部 中継技術部 吉田 夏樹 様

『FX6』レベルのクオリティをリモートで叶える逸品

藤本 昔からカメラマンの立ち入りが難しいステージ上に仕込むカメラが欲しかったのですが、サイズと画質の両方に満足できるリモートカメラが見つかりませんでした。出演者や観客の視覚の邪魔になってしまったり、ステージの中の映像だけ画質が異なり違和感が生まれたりといったことが課題でした。解決方法を長らく模索していた中で『FR7』発売の話を耳にし、その後、偶然社外案件の現場でチームを組んだ制作技術会社が、『FR7』を使用していました。

『FX6』と変わらないクオリティを出せるリモートカメラというのが初めて見た印象で、『FR7』なら思い描いた映像が撮れると可能性を感じました。すぐに、ソニーに実機を持ち込んでの商品紹介をリクエストしました。実際に『FR7』を触ってみると、「確実に出番があるカメラだ、早く現場で使いたい」という気持ちが強くなり、2台購入しました。

機材の所有を決めた理由は、撮影に積極的に投入しやすい環境をつくるだけでなく、カメラ配置や演出テクニックの開発、撮影スタッフのスキル向上を社内で行うためです。今では、所有している2台はほぼフル稼働しており、レンタルを含め計6台を使用する現場もあります。



『FR7』がステージ上カメラの映像表現を一変



ステージ上カメラの悩みを『FR7』が一気に解決

藤本 『FR7』を初めて使ったのは、ソロアーティストのバンド構成のライブ収録でした。曲の演目に合わせて、アーティストのバック上方から差す照明を逆目から明るめに入れ、印象的なシルエットを狙いました。ステージ中央でアーティストの目の前という狭いスペース、本来はカメラを配置できない場所でしたが『FR7』なら置けるということで、私の要望で置かせてもらいました。

吉田 今まで、このような位置は、映像のクオリティは低いがリモートでアングルを動かせるカメラか、映像のクオリティは高いがアングルは固定のカメラのいずれかの選択肢しかありませんでした。映像のクオリティが高く、なおかつリモート操作可能な『FR7』の登場は、ステージ上カメラの映像表現を完全に変えました。

藤本 こういったステージ上カメラの悩みは、技術の段階的な進化により少しずつ解決していくものだと思っていました。ですが、『FR7』の登場は、悩みの解消に対して飛躍的な進歩を感じるインパクトのあるものでした。

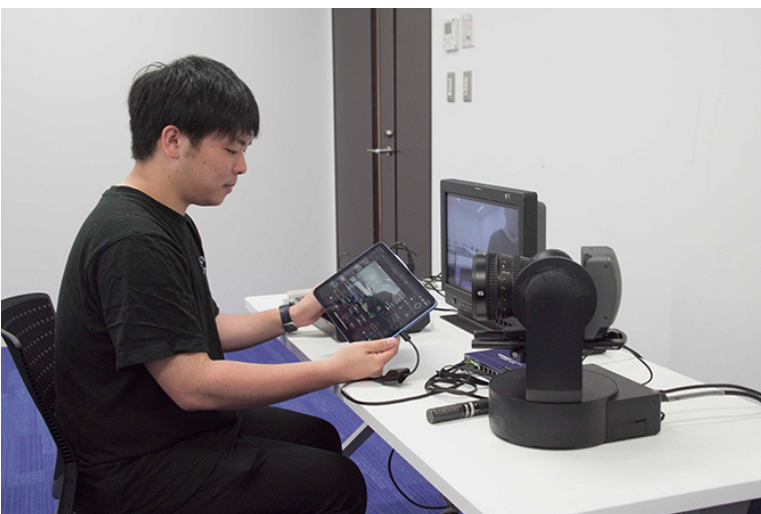
操作面の充実や本体収録機能にも高い利便性

吉田 コントロールパネルとタブレットは、『FR7』1台ごとに1ペアを用意してオペレーションしています。実際に使ってみて、タブレットでワンタッチという操作性と、ハードウェアのコントロールパネル『RM-IP500』によるパン・チルトに対する追従性が良いと思いました。

映像演出のためのフォーカス送りなどは『RM-IP500』上でマニュアル操作を行っていますが、ライブ中の瞬時的なフォーカス合わせではタブレット上のタッチトラッキング AF 機能に頼ることも多いです。さらに REC 操作や REC レビュー、メニュー操作などはタブレットで行っています。REC については、リモートカメラでありながら、外部収録の用意が必要なく、本体収録が行えるのも運用しやすいと感じるポイントです。



アーティストとカメラの距離が縮まり画力の向上に



ステージ全体がカメラポジションの候補に変わる

藤本 初めて『FR7』を使って手こたえを得てから、バンド系ライブの現場ではほぼフル稼働しています。アーティストの構成や現場環境により異なりますが、ステージ内に満足するクオリティのカメラをリモートで置けるようになり、今まで撮れなかった映像が撮れるということはとても大きなアドバンテージで、演出上の戦略を増やせるカメラとして重宝しています。

例えば画力です。映画でも決定的な表情を撮影するときは被写体に寄って画力を上げるように、コンサートやライブでも、アーティストとカメラの距離感を縮めて画力のある映像を撮影できるようになりました。

吉田 具体的には『FR7』をステージ奥のドラム脇に置き、そのドラムをナメながらアーティストの動きをフォローして微細な動きや表情を捉える場面や、電子式可変 ND フィルターで被写界深度を維持したフォーカスワークでアーティストを印象的に映す演出などです。フルサイズセンサーのぼけ表現とリモート操作という、2つを実現できる『FR7』だからこそ叶えられたことです。

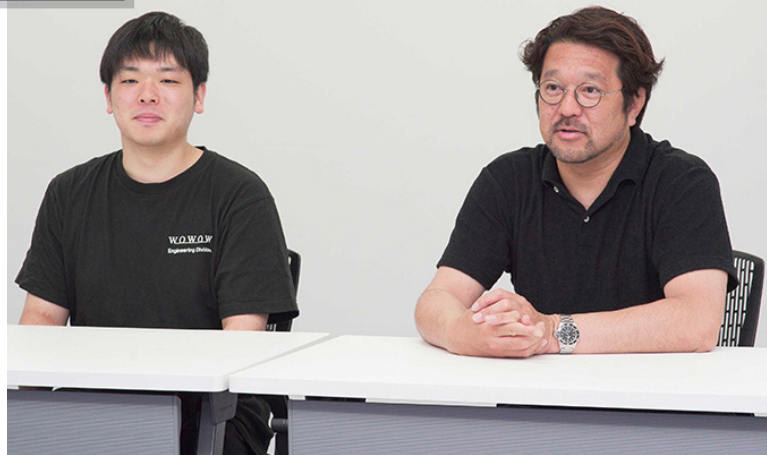
藤本 今までステージ奥にいるメンバーを望遠で撮影していた画が、広角でアーティストの近くに迫って撮影できるようになったことで力のある画になりました。また、観客席からは見えないアングルを映像で届けられるようになり、まさしく『FR7』導入前にやりたかったことを実現できました。



音楽ライブ収録・中継で導入が広がる

現場で『FR7』を目にして導入を決める会社が増えている

藤本 私が初めて『FR7』を見たときのように、現場で一緒に組んだ協力会社が、私たちが『FR7』を使用している現場を見て、購入を即決した、使用を決めた、という話を聞きます。また、キャットウォークからの天吊やステージの中央の寄りの画など、総じて従来は狙えなかった場所に『FR7』を置く前提でプランを考えるケースが増えているため、音楽ライブ映像では『FR7』の引き合いが一層増えてくると思います。



新しい映像表現に挑み更なるクオリティアップへ

吉田 当社では今のところ『FR7』を主に据え置きで使っていますが、特機と組み合わせれば、さらに面白く、新しい映像を創っていきなと思っています。今後も『FR7』の新しい使い方を模索していきたいと思っています。

藤本 収録だけでなく、ライブ中であってもステージ上に設置されている大型スクリーンを見ているかたは多くいます。『FR7』で捉えやすくなった観客席から見えない細かい場所や瞬間の映像を届けて盛り上げていきたいです。

使用機材紹介



Cinema Line カメラ

FR7

<https://www.sony.jp/ls-camera/products/ILME-FR7/>



リモートコントローラー

RM-IP500

<https://www.sony.jp/remote-camera/products/RM-IP500/>

取材：2023年5月

>> [法人向け] カメラの商品情報やお客さま事例をご覧ください。 <https://www.sony.jp/camera-biz/>

>> 製品やサービスに関するお問い合わせ https://www.sony.jp/biz/inquiry/form_camera.html

ソニーマーケティング株式会社

法人のお客様向け購入相談デスク ☎ 0120-24-7688 スマートフォン・携帯電話・一部のIP電話からは 050-3754-9483

受付時間/10:00~18:00(土・日・祝日 休み)